

# JOURNAL

男女平等推進センター  
ジャーナル

2009

vol.33



## Contents

- 事業紹介  
チャレンジしよう自分のための仕事づくり!  
こうやって治せる 女性の排尿トラブル
- 誌上講座レポート  
記念講演「ひとりの覚悟」 沢木 耕太郎
- 特集…くるめフォーラム 2009  
「響きあう 男女たちの生き方」
- 女性に対する暴力をなくすキャンペーン
- 相談室だより  
性犯罪の裁判員裁判にみる問題点と  
今後のあり方
- 登録団体紹介  
登録団体ってなあに?
- 図書情報ステーションコーナー  
ひとりの準備 みんな最後はおひとりさま

<http://www.city.kurume.fukuoka.jp>



登録団体ってなあに?  
登録団体の利用は、登録団体からの申込みが必要で、登録団体の特典です。専用施設は有料ですが、2階会議室(親子館)は無料で使用できます。また活動交流スペースはいつでも自由に団体の情報交換などに使用できます。おひとりの利用も可能です。男女平等推進センターの登録団体は、男女平等推進センター専用施設は、定員12名から最大22名までの大・中・小の研修室があり、機織機材やスクリーンを設置しています。テレビデオやマイクセットなども無料で貸出しています。

登録団体ってなあに?  
①団体の情報交換  
②団体の活動について  
③男女平等推進センターの専用施設の利用  
④この日の活動参加者やスタッフの交流  
⑤グループ活動の準備  
⑥活動の振り返り  
⑦活動の記録  
⑧活動の宣伝  
⑨活動の記録  
⑩活動の記録



自由に使える活動交流スペース

## 図書情報ステーション

### ひとりの準備 みんな最後はおひとりさま

#### おひとりさまでもだいじょうぶ。

吉田太一 ポプラ社 2008年  
「おひとりさま」この言葉からイメージするのは女性?しかし、実際は男性の「おひとりさま」の孤独死が多く問題点も多いそうです。孤独死とは、息を引き取る瞬間にひとりだったかどうかではなく、人生の終盤が孤独な生活だったかどうかでは?と考えさせられる1冊です。



#### おひとりさまのイエローページ



#### おひとりさまのイエローページ

和泉昭子 メディアファクトリー2008年  
「ひとり」でいることに不便や寂しさを感じたら、それを解消する手段を探せばいい。テーマごとにシングルならではのお役立ち情報を紹介します。手がかりとなる情報が見つかりますよ。

#### おひとりさまの「法律」

中澤まゆみ 法研 2008年  
「世の中にはいろんな決めごとがあって、知らなくてソンをすることがたくさんある。知っているのと知らないでは大違い!」ももとの「おひとりさま」、ある日突然の「おひとりさま」が少しでも明るく生きていけるようにと、当事者目線で書かれた1冊です。



●徒歩/西鉄久留米駅から約10分(約700m)  
●バス/西鉄久留米駅から約5分  
JR久留米駅から約20分  
「初務駅前」下車、徒歩3分  
●駐車場(有料)はございますが、おいでの際はなるべく公共交通機関をご利用ください。

この公開物は複製に際し、再転載を禁じます。

# 記念講演 ひとりの覚悟

講師：沢木 耕太郎 (ノンフィクション作家)



1947年東京生まれ。横浜国立大卒業。ノンフィクションとして『若き力者たち』『敗れる者たち』等を発表。1979年『テロルの決算』で大宅 士一ノンフィクション賞。1982年『一瞬の夏』で新田次郎文学賞。1984年『パーボンスリット』で第1回読者誌エッセイ賞受賞。『運』(2005年)他多くの作品を発表。また若き日2万キロの道のりを乗合バス等でユーラシアの果てまで旅した『深夜特急』は紀行文学・青春文学の金字塔と賞われている。スポーツや旅などを題材にしたノンフィクション作品を数多く発表している。

(このレポートは10月3日に行われた講演をセンターで要約したものです。)

## 僕が飛行機で墜落した話

数年前、仕事でブラジルのアマソンの奥地に行った。現地近くの飛行機からセスナ機でそこに向かったのだが、そのプロペラ機は、離陸後しばらくして真付近から黒い水を流し、そのうちプロペラが止まり操縦不能となってしまった。パイロットが「もうすぐ落ちる。」と言う間にも、じりじりと密林は近くなってきて、私はシートを背もたれにしがみついているしかなかった。その時に何を考えていたかという、私の頭の中には何もなく、一緒にいったクルーの口癖の「マジかよ〜」ということばが響くばかり。そうこうしているうちにとうとう機体は密林に激突。運よく僕が飛ばされたのは焼畑農業でさら地になっていた所だった。僕は背中を強打し、痛みが1年くらい続いたものななんとか無事だった。「墜落という時、何も考えなかったのですか?」とよく聞かれた。しかし、その時は確かに「死ぬ」ということに動揺しなかった。「充分に生きて、充分に楽しんで、充分に仕事をした」という意思をずっとどこかで持っていたからだと思う。だから「ここでもう終わり。」と言われても「そうか、それでも充分満足。」といった頃からか思い始めていたと思う。そう思えたのは、それまでひとりで生き、ひとりしているなことをやってきた結果という気がする。

## 「自分のことは自分でできる」という自信

何かする時に、ひとりなのか、集団なのかという選択で、いつも僕は前者をとってきた。当然リスクはあったはずだが、僕は直感的にひとりという道を選んだ。ひとは言いえると「ソロ」。対する集団は「パーティー」。これは山登りの概念で、「ソロ」のクライマーが「パーティー」を組む時、相反するのではなくかみさりあうものとなる。例えば、僕は「ソロ」で生きている、といっても家庭を持っている。僕は対外的には「ソロ」であるが、家庭に戻ってくれば「パーティー」を組んでいる。しかし、仕事や家庭を持つ時に明確な意思があったわけではない。僕は家や家庭には無自覚だったが、少しずつ年を重ねるごとに学んでいったと思う。家事はほとんどしたことはなかったが、結婚した時、妻から「あまりにもかげないそうだが、もし私と離婚したらひとりで生きていけない。だから、離婚しても大丈夫なように私が仕込んであげる。」と言われた。それから30年僕は仕込まれた。そして、妻が「いつでも離婚してあげる。」という域に達した。どれくらいすごいかという、料理が終わる時にはきれいに台所を片付けているほどなのだ。また、冷蔵庫にあるもので何か料理が作れる。不得意だったワイシャツのアイロンかけもできるようになった。僕は、わりと豊富なところがあるので、妻の言うとおり家事等を100%やっているうちに何でもできるようになった。そのことはもちろん彼女にも都合がいいだろうが、一番ありがたかったのは僕自身である。自分のことは自分でできるということは、生きていくうえでこれ以上の自信はない。少なくとも僕はそんな自信をもっている。

## 「ソロ」と「パーティー」

男性が家に帰ってきて「ソロ」で生きられる能力があれば鬼に金棒であるように、女性の側も外に出て「ソロ」で生きていける力を持っていれば、家の中で2人の「ソロ」の熟達した力を出しあうことができる。要するに「ソロ」で生きられる人たちが「パーティー」を組んで力を出しあうのが理想的な形ではないかと思う。例えば会社の場合、「ソロ」で生きていける人が「パーティー」を組めば、完璧とはいえないにしても、かなり高度な集団になっていくと思う。きっと家庭も「ソロ」で生きられる能力を持った男女が、できれば一緒に「パーティー」を組み、そこに子どもという存在がいて、子どももそういう2つの能力を持てるようであつたらもっといい。それはなかなかうまくいかないかもしれないけれど、理想論としてはそうである。「ソロ」で生きていける能力を身に付けていくと自信が持てるようになる。同時に生活も「ソロ」でできるということで、何かその自信が家族や他の人に対してのある柔軟さを生むような気がする。

ともあれ、どんな生き方にしても、人はいずれ「ソロ」になる。だから僕たちは「ソロ」で生きていくために、その能力を培うための何十年間かを生きていくのかもしれない。そうして人生の終盤、文字どおり「ソロ」になった時に、その力をゆっくり出していけばいいと思う。

働く女性のための起業支援セミナー (9月4日、11日、18日)

## チャレンジしよう 自分のための仕事づくり!

これからの自分に何ができるか、雇用が厳格かと、人生の転機にあってその選択に悩み悩んでいる女性たちに、それまでの経験や能力についての振り返りや思いやりを身につけ、あわせて起業準備から起業にいたる苦楽や悩み、自信をつけようという、仕事をもちこたえなどを聞いて、近未来のビジネス立ち上げを応援しました。

### <公開講座>

#### ● 仕事づくりカフェ

～ 地域をめくみ、仕事づくりのキーワードに～

対談：高山 美穂 (U Planning & Design 代表)

：矢野 真由美 (高山産直実行委員会 幹事)

この時間は、私たちの生活の場を仕事の舞台にしてしまったお二人の対談。高山さん紹介のビデオ観覧で、みるさと「みのう」の風景の美しさを再認識し、地元の果物・野菜などを女性たちの目で発見していくプロセスに、新たなビジネスの可能性を体験、ワクワクした気分になりました。

また、矢野さんの被「はば」に書ける思いとその行動力に、一同感動。気持ちが高揚したら、実際に身体を動かしていくことが仕事を作り出すのだと実感させられました。

市民グループ公募企画 (9月26日)

## こうやって治せる 女性の膀胱トラブル

企画：久米市障がい者協会女性部

講師：守屋 智久子 (久米市立総合医療センター泌尿科・理学療法士)

今回の企画をしたのは、手話で通常のコミュニケーションをする市民グループの皆さんたち。手話による代表の挨拶が聴取者の声になってセミナーは開催されました。

守屋先生は、まず、膀胱トラブルの概要・診断は泌尿器科で行なっていることと説明し、次にビデオを使って、女性の排尿の仕組みや尿失禁の原因を分かりやすく解説されました。尿失禁は、出産や加齢等で骨盤底筋群が弱んだために起こることが多く、出産を経験した女性の約半数、成人女性の2/3が尿失禁の経験があるという数字も出ているそうです。また、くしゃみや咳をしたときに起こる慢性尿失禁の9割近くは、骨盤底筋を鍛える事で治せるとのことです。お話を聴き、ビデオを見ながら、先生の指導で受講者全員で骨盤底筋体操をやってみました。はじめは緊張が分らず戸惑いましたが、体験後、再度解説。疑問も試している内にコツがつかめてきたという声があがりました。



慢性尿失禁の経験者の膀胱トラブルも原因では、咳や頻尿な習慣で治せないので、1人で悩まず泌尿器科を受診して下さい。

守屋先生

## 事業紹介



### ● ～起業って、なに? なぜ、起業?～

講師：田中 由紀 (株式会社経営者世代育成財団 さんへ <金加担の会>)

自分にはできるわけがないと、今までは行動を起こす前にあきらめていたところがありました。「まず一歩踏み出すこと」「大切なのは何が出来るか」ではなく「何をしたいか」という田中さんの言葉が心に響きました。

体験発表者：井島 信枝 (ホームページ制作・SOHO) さんより <親子のメールから>

女性が専業主婦しながら仕事をすると、いろんな悩みが生じます。私も専業主婦しながら、探して進んでいきます。専業主婦になるにも、スタートが一歩づつかかと踏み出す。子育てをしながら、皆さんの背中を背中から支えたいのでお話を聞かせてください。



### 企業者から

以前、地元平等推進センターの催しで守屋先生から聞いた「膀胱トラブルに悩まれている」という話をもちっと多くの女性たちから聞いてほしいという思いがたけで企画しました。高野先生からあきらめていた尿失禁が簡単な体操で治せることのできるものだと分かり、参加者にはもっともとの喜びの表情がみられました。

グループの仲間だけで多く多くの女性に届けたことは、私自身にとっても、すごく嬉しいことです。こういった活動企画を利用して、また平等推進センターと関係が深まるといいと思います。

「HIVを知ろう」/Support of the Child

HIVが感染していくことを体感できる“水”を使ってのワークや講演。グループワークではHIVに感染せずに互いを尊重できる関係について考えました。



「昨日・今日・明日 女と男～生きることに働くこととを  
考える～」/久留米男女共同参画推進ネットワ  
ーク劇をとおして生きることに、働くことの難しさと同  
題点を考えました。会場は、笑いと共感の声であふれ、  
後半のフリートークでは3人の方から各々の働き方、  
生き方の提議がありました。

「一人芝居と語りでつづる女性の権利の歴史」  
城島女性ネットワーク

女性の権利が軽視されていた時代に、力強く生きた女性たちの話  
が一人芝居と“語り”で演じられ、男女共同参画社会づくりの重要  
性に気づくことができました。



「男女に生きる私たちの生き方」/田丸町女性ネットワーク  
男女がいかにお互いを「頼」として認め合いながら、生きて  
いくことができるか。介護を取り巻く現状や社会の実態につい  
て事例を挙げながらの講演でした。



「いつまでも若く！美しく！パートII」  
北野女性ネットワーク

久留米絆をパリ・コレクションで紹介したファッションデザ  
イナーの尾藤照子さんの講演と、地域の女性たちがモデルにな  
ったファッション・ショーで会場は盛り上がりました。モデル  
には男性も起用されました。



「みんな(男女)が安心して働き、生きられる社会をめざして！」  
三浦女性ネットワーク  
前半は、えがりがりて久留米芸術劇団による創作劇の上演。生きる  
ことに働くことの問題点を提起する迫真の演技に、会場には共  
感の声と爆笑が響き渡りました。

映画 マルタのやさしい刺繍

—夢みるパワーとは、あきらめないココロ—



提供=アルシネアラン

スイスの谷間にある保守的な村で“ランジェリーショップをオープンさせる”という夢  
をもつ80歳のマルタ。夫との死別の悲しみを乗り越えて夢をあきらめないマルタと村の女  
性たちを描いた「マルタのやさしい刺繍」が上映されました。参加者からは「生きる元  
気ももらいました」「新しいことにチャレンジしたくなりました」「いつになっても夢を  
持つことの素晴らしさを感じました」などの声が寄せられ、人生の希望や目標を持ち続け  
ていくパワーをもらったようです。

2006年 スイス 監督：ベティナ・オベルリ  
キャスト：シュテファニー・グラウザー ハイディ・マリア・グレスナー

特集 くるめフォーラム2009



わたし 響きあう 男女たちの生き方

・市内の43の団体・グループを中心に、総勢60人  
からなる実行委員会が結成され、約6ヶ月かけての  
めフォーラム2009の準備が進められました。  
期間中は、記念講演・セレモニー、映画上映や展示・  
パズルのほか、男女共同参画社会実現をめざす活動を  
している17の団体・グループにより、えるピア  
久留米や地域会場で市民企画が実施されました。演劇、  
ワークショップ、替え歌の合唱など工夫を凝らした多  
彩な企画をご紹介します。

「里親が訪く日々の生活～個として尊重され、地域で育つ子  
どもたち～」/親と子のこころの対話研究会

里親教育専門員から、子どもの虐待やその影響についての  
説明や、17年間に5人の子の里親となった体験報告などもあ  
り、子どもの安心感を保証する継続的な活動が提案されました。



「男女平等教育は今」/久留米市男女共同参画教育を推進する会  
久留米市内の全小学校5年生と中学2年生を対象に行った「男女平  
等教育に関する意識調査」の報告を受けてのパネルディスカッション。  
パネリストの思いやそれぞれの男女平等観などについて語り合いました。



「おはなしと音楽にのせて～響き合う瞬間を求めて～」  
ローズマリー

男女平等をテーマにした絵本「おはなしの朗読・読み聞かせなどをベ  
ースに、ピアノとチェロの生演奏で感動的なひとときとなりました。



「歌いどばソラジェンダー 歌いあげよう私らしい人生」  
S-ba～ぶるりばん  
男女平等や女性の自立、女性に対する暴力防止をテ  
ーマに、おなじみの曲にオリジナルの歌詞をつけた替  
え歌に、来場者も加わって大合唱となりました。



「格差社会ニッポン～女と男の貧困脱出法～」  
北京JAC九州 in 久留米・女闘研

ジャーナリストとして第一線で活躍する朝日新聞社  
編集委員の竹信三恵子さんの鋭く鮮やかな講演に参加者  
は大納得。「劣悪な方向に進んでいる女子労働の現状」  
とその解決法についてのお話でした。



「考えていますか？ 夫婦のこと、老後のこと」  
NPO法人新現役の会ちくごセンター

定年を迎えた夫婦を軸に、その親の世代の介護などをテ  
ーマにした寸劇をみて、夫婦の相互理解の大切さを考え、  
パネラーの意見交換をとおして日常の課題を探りました。



「はたして専業主婦は生きのびられるのか」  
NPO法人ル・バニー

参加者全員で「私たちの今」を考え、詩にして朗読。その後のワ  
ークでは参加者相互の意見交換をして、社会の移り変わりとともに  
「制度」としての専業主婦はどうなっていくのかを検討しました。



「介護の社会化は・・・今？～女性の介護・男性の介護～」  
高齢社会をよくなる会・久留米

介護を取り巻く現状や社会の実態について事例を挙げながら  
の講演。高齢者の介護で一番大切なのは、心のケアであるとの  
訴えが心に残りました。



10.8%



# 女性に対する暴力をなくすキャンペーン

※国では11月12日から「女性に対する暴力撤廃国際日」の11月25日までの2週間を、「女性に対する暴力をなくす運動」実施期間と定めています。この期間に久留米市男女平等推進センターで取り組んだキャンペーン事業の概要を報告します。

## 【講演会】 性犯罪被害者をめぐる現状と課題 11月18日 講師: 本山央子 (アジア女性資料センター)

裁判員裁判開始に伴い、私たちの目に入ったようになった性暴力被害者をめぐる状況…。アジア女性資料センターの事務局長で「性暴力禁止法をつくらうネット」にも加入され今最もホットな情報をもつ本山さんの講演の概要を報告します。

### 【はじめに】

横須賀で起こった性暴力事件の例を見てもわかるように、被害を訴えた女性が、何の医療的ケアも心理的なサポートも受けられず、被害者としての権利が認められていない現状がある。そこにあるのは、性暴力は「あってあたりまえ」という意識であり、そのため被害者はなかなか声を上げられず、社会からは「視えない問題」とされてきている。



### 【裁判員制度が性暴力の問題を視える問題に】

性暴力被害者の実態が視えてきたきっかけとして、裁判員裁判制度の開始がある。裁判員裁判の対象となる性犯罪は全体の2割を占めるが、今年5月21日からのスタート直前まで、性暴力事件をこの制度で取り扱うことの問題性に誰もが気づかなかった。

- ① 通常の事件は加害者が裁かれるが、性犯罪事件では事実上裁かれるのは被害者で、まず被害者の「落ち度」が問題にされる。
- ② 性犯罪の被害者の多くは、事件のことを他人に知られたくないと思っているが、そのことについて何の配慮もされていない。

これらのことに気づかせてくれたのは被害当事者である。また裁判員には、被害者と利害が絡まない人を選ぶが、選任過程で、被害者を特定する個人情報や何の守秘義務もない候補者に知られること、性犯罪に関する見識を持っているとは考えにくい一般市民の裁判員が、二次被害を与えてしまう可能性が懸念されることも問題として視えてきた。私たちは5月21日の裁判員制度のスタート直前に被害当事者から提起を受け、「性暴力禁止法をつくらうネットワーク」として裁判員手続の中止を求めた緊急署名活動を行った。

5月19日に最高裁判所に申し入れたが、取り上げられず、裁判所では何も考えられていないことがわかった。次に6月4日に最高裁、超党派の議員を交えて院内意見交換会をもち、そこで最高裁から、被害者に裁判員候補者の名簿を示して関係者がいないか確認めると言う改善策が示された。

### 【裁判員の選任から、さらに発展】

これらの取り組みの中で、今後は検察庁に働きかける必要性が視えてきた。裁判の中で、犯行の様子を説明する際の配慮として、傍聴者にも見える大型

スクリーンに映さない、裁判官等の手元の書面にとどめる等、プライバシーの流出を防ぐための対応を求めてきた。これらの取り組みにより、5月以降多くの人が性暴力に関心を持ってくれるようになったのは成果の一つである。今後も緊張感を維持し、配慮が必要と声を上げ続けることが必要と思う。

### 【性暴力根絶に向けた取り組みの方向性】

性暴力禁止法を作る動きが始まっている。性暴力に関する主な問題点は、まず①性暴力の定義である。現行刑法の強姦罪の基準にあるのは、父親や夫の所有物とされる女性の貞操と社会の秩序である。個人の性的自己決定権や性的自由への侵害行為として強姦を再定義すべきだ。また、男性が被害者として想定されていない現状も改めるべきだ。さらに職業裁判官への性暴力に関する研修も不十分であり、一般的にレイプにあつたら「被害者は必死で抵抗するもの」「見知らぬ人から、夜道で突然襲われる」等、思い込みや偏見も根強い。

②被害者に対する支援システムが整っていない。24時間のワンストップセンター、クライシスセンターが必要である。被害者には刑事告訴を望まない人もおり、必ずしも警察である必要はない。被害にあつた時、まず安心させてほしい。体の手当てをしたり、妊娠の心配への対処をする等、いろいろな分野の専門職の関わりが必要である。すでに飯南中央病院など民間病院で新たな試みがされている。そこには性暴力に関する知識を持つ医師や看護師がいる。これらの医療専門職を養成するNPOもあるが、経済的に支援する制度がなく、運営は厳しい。

最後に、性暴力被害者がなぜ声を上げられないのか、何が邪魔してそうなのかは調査すべきだ。今は裁判員制度の開始をきっかけに性暴力問題に対する関心が高まっており、制度などを変えていくチャンスと考える。

## 相談室だより

今回も、性犯罪の被害者支援センターより、11月20日の性犯罪被害者の相談室の様子を報告いたします。相談室には、性犯罪被害者支援センターの相談員が、被害者の悩みや疑問に答えるとともに、被害者の権利や法律について説明いたします。

相談室には、性犯罪被害者支援センターの相談員が、被害者の悩みや疑問に答えるとともに、被害者の権利や法律について説明いたします。

相談室には、性犯罪被害者支援センターの相談員が、被害者の悩みや疑問に答えるとともに、被害者の権利や法律について説明いたします。

いって、被害者を特定する個人情報も保護され、被害者の権利も守られるように努めます。相談室では、被害者の悩みや疑問に答えるとともに、被害者の権利や法律について説明いたします。

相談室には、性犯罪被害者支援センターの相談員が、被害者の悩みや疑問に答えるとともに、被害者の権利や法律について説明いたします。

相談室には、性犯罪被害者支援センターの相談員が、被害者の悩みや疑問に答えるとともに、被害者の権利や法律について説明いたします。



●【寸劇】DVって何だか 4巻作 11月18日  
巨人の星や、サザエさん、ロストワンドを、ダースベーダーといった作品をパロディ化した寸劇を通して、DV問題の本質を告げたい心が学ばれた。

●【上映会】「レイトミロード」 11月13日  
不法参謀として7年間で働いてきた4人組の男の物語。社会の裏面に直視して、最下層で生きる人々の厳しい現実を突きつけられる。人々の、人間らしい暮らしがしたいという切なる願いが胸を打った。

●【全米シエルターネットワークの報告】  
11月12日～11月25日 共有事業  
全米シエルターネットワーク2010年くるめ実行委員会  
初回の総額が今年のとちぎ大会まで12回にわたる足跡をパネルで紹介、DV根絶に向けての女性たちの思いが語られました。

●【脱身術】親子で学ぶ脱身術 共有事業  
11月14日 講師: 本山央子 企画/NPOはぐるま  
家で練習できるように、親子で脱身術の理論と実践を学びました。早足強歩して相手の力を外す技は、子どもも真似そのもの、自分の成長と力を信じて行動する大切さも学びました。

●【シンポジウム】DV被害者に対する性虐待及び性暴力被害当事者へのサポートと途 11月18日 報告事業  
企画・実施/NPO法人全米女性シエルターネット

【午後の部】全米公開講座  
「本質のことを知ってほしい～DV家庭における子どもの性虐待について～」全米女性シエルターネットワーク事務局長 渡野智子  
「小児科医の現場から見たこと」 小児科医 渡野智子  
渡野さんから、全米女性シエルターネットワークが実施した婦人保護施設や民間シエルターを利用したDV被害者に対する性虐待・性暴力被害に関する調査の結果から、DV家庭では性虐待の発生率が、児童科医現場で把握している比率の約2倍であること、加害者は英文が一通りいける実力が明らかになったと報告。支援者はこの事実を受け止めることが必要と力説された。

【午後の部】サポート研修会  
「性暴力被害者・性虐待被害者への対応」 久留米市男女平等推進センター・社会福祉士石本麻子  
「支援をめぐる動き～今後の方向性～」 全米女性シエルターネットワーク事務局長 渡野智子  
石本さんから、性虐待、性暴力被害者のとらえかた、実際に被害にあったときのノウハウについて解説。知持ちの顔色が当惑のように感じるとともに、周囲から「困った人」と思われがちだが、「困っている人」「生活の中で生き抜いてきた人」ととらえることが大切と語られました。最後に、渡野さんから、性暴力問題を解決していくための今後の方向性について、レイプクライシスセンターの取組、DV罪の創設等、今後の取り組みについて考えるヒントが示されました。